

みこころを知る道(3)

2008.12.09(火)

ベック兄メッセージ(メモ)

引用聖句

エペソ人への手紙 3章16節から19節

どうか父が、その栄光の豊かさに従い、御霊により、力をもって、あなたがたの内なる人を強くしてくださいますように。こうしてキリストが、あなたがたの信仰によって、あなたがたの心のうちに住んでいてくださいますように。また、愛に根ざし、愛に基礎を置いているあなたがたが、すべての聖徒とともに、その広さ、長さ、高さ、深さがどれほどであるかを理解する力を持つようになり、人知をはるかに越えたキリストの愛を知ることができるようになります。こうして、神ご自身の満ち満ちたさまにまで、あなたがたが満たされますように。

今読んでいただきました手紙の箇所は、既にイエス様に出会った人々、即ち心の平安を得て救われたと確信するようになった人々のために書かれたのです。エペソ書は、未信者のために書かれているわけではありません。信じる人々の成長のためです。(手紙は全部そうなのです。)

人間は悩むと、誰でもどうしようかと考えます。私もよく聞かれるのです。「どうしたらいいでしょうか」と。そして大体本人が答えるのです。「祈りでしょうね」。その通りです。けれど、前に話しましたようにちょっと違うかもしれません。「主は私に何を望んでおられるのか」と、まず主のみこころを確信してから祈ったほうが良いのではないのでしょうか。ですから、祈りだけではなく、聖書のみことばも同じように大切になります。「みことば」を通して、主は私たちに語ってくださり、確信も与えてくださいます。そのうえで答えとして私たちは祈るのです。

けれども、信じる者にとって最も大切なことは、「みこころはいったい何なのか」。また、主なる神のみこころはどのようにすれば知るようになるか、ということではないでしょうか。前に話しましたように、結論は明らかです。みこころは、ただ聖霊によってのみ知ることができるのです。そして、聖霊はおもにみことばを通して語ってくださるのです。

詩篇の作者であるダビデはよく祈りました。「主よ。教えて！ 主よ。導いてください。主よ。私を守ってください」と。どうしてこのように祈ったかと言いますと、守られなければおしまい。導かれなければ全ては意味のないことだからです。

御座にまで届く祈りをしたいなら、御霊に導かれる祈りをささげなければなりません。

ですから大切なのは、祈りの前に主のみこころを確信することではないでしょうか。この確信を私たちに与えてくださるために、御霊が与えられています。

簡単にまとめてみると、「導き」とは内に住みたもう御霊によってだけなされるのです。そしてこの「内住の主の導き」は、ある人々にだけではなく、全ての救われた人々に与えられている特権です。

前回、何かの問題にぶつかったとき、どのように御霊の導きを知ることができるか、という点について考え始めました。今日も続けたいと思います。

* 第一番目。御霊の導きを求める場合、全てのものは主のご栄光を現わすためにするべきです。

コリント人への手紙・第一 10章31節

こういうわけで、あなたがたは、食べるにも、飲むにも、何をするにも、ただ神の栄光を現わすためにしなさい。

「主のご栄光だけが明らかになるように」。このような心構えを持つと、主は導くことができになるのです。

全く御霊に導かれたお方とは、言うまでもなくイエス様です。イエス様は絶えず御霊に導かれたお方でした。詩篇の作者のことばは、本当はイエス様の祈りです。

詩篇 40篇8節

「わが神。私はみこころを行なうことを喜びとします。あなたのおしえは私の心のうちにあります。」

このイエス様の祈りの態度こそ大切です。イエス様の心の持ち方こそ常に導かれる秘訣です。ですから、イエス様はおっしゃいました。「わたしを遣わした方は、わたしとともにおられます。わたしを一人残されることはありません。わたしがいつも、そのみこころにかなうことを行なうからです」と。

人間には決して言えないことです。私たちは時々行なうことかもしれません。けれどもイエス様は、「いつも」とおっしゃられたのです。私たちの心の態度が主のみ栄えを第一にしているなら、主は導いてくださいます。そして御霊の導きを求める場合、全てのものが主の栄光のためであるということを知らなければなりません。

* 第二番目。主の導きはいつもみことばにのっとっています。

即ち御霊の導きは、いつも必ず主のみことばである聖書に基づいています。したがって、聖書の知識は信じる者にとって本当に大切です。言うまでもなく、救われるためではありません。成長のため、導かれるため、用いられるために、「聖書は何と言っているのか」ということをどうしても知る必要があります。

主は、みことばによってご自身を啓示してくださいました。多くの信者は、イエス様が

いろいろなことを教えようと思われたらしい、と。それは毎日何時間も教えられたからでした。けれどそれは違います。イエス様はいろいろなことを教えようとはなさらなかったのです。ご自身を明らかになさるために、いろいろなことをおっしゃられただけなのです。即ちみことばによって、イエス様はご自身を啓示してくださったのです。ですから、イエス様はよく当時の聖書学者たちにおっしゃいました。「あなたたちは聖書の中を調べているが、みことばを食べることを欲せず、自分のものにするのを欲せず、いのちを受けようとしていません」と。

聖書を読むことと、いのちを得ること、つまり元気になることは一つのことであり、決して二つのものではありません。

どうしたら聖霊の導きが分かるのでしょうか。今話しましたように、まず、全ての物ごとは主のご栄光のためにあるべきです。

二番目。主の導きはいつも聖書のみことばにのっとっています。いつもみことばに基づいていなくてはなりません。

* 第三番目。御霊の導きには、良心と理性も関係があることを知っておく必要があります。

私たちの持っている良心は、主によって与えられているものです。もしある問題について良心が、これは駄目、良くないと判断したなら、御霊の導きを待っている必要はありません。しかし行くべき道が分からず、どちらに行くべきか迷っているような場合、ある一つの道に行くのに平安がなかったなら、さらに導きを求める必要があります。

良心とともに、私たちの持っている理性も、主がくださったものです。多くのキリスト者が迷ってしまい、支離滅裂な信仰生活を送っているのは、自分の考えと主のみこころをまぜこぜにしているからです。自分の理性を主の前に持って行き、主の導きを仰がないからです。

アブラハムは、四千年前に生きていた男でした。彼は主を知りながら、あるとき飢えを恐れて、自らの考えで豊かなエジプトへ逃れてしまいました。結局逃げたのです。そこで罪を犯してしまいました。自分の理性で勝手に行動するときの危険を、聖書はアブラハムを通して教えています。彼は、「そうしないと駄目だ」と思い込んでしまったのです。主にとって不可能なことはないという事実を、全く忘れてしまいました。

ある人々は、「理性は何の役にも立たない。理性は肉につくものだ」と言いますが、これも間違いです。理性が信者の内にしもべの位置を取るなら、非常に用いられる存在となります。けれど、理性が信者の中の支配者になるとき、間違っただ道へ私たちを導いてしまうでしょう。

私たちは理性で聖書を読み、真理を秩序立て、みことばを読み、また暗記します。けれど、このときも理性は、私たちのうちに住んでおられる御霊によって支配されなければなりません。導きは御霊だけがなさることです。理性は御霊の導きを実現する道具のようなものに過ぎません。何か大きな問題にぶつかったら、その問題を、理性をもってあらゆる

面から考える必要があります。前に述べた二つのこと、即ち、どうしたら主のみ栄えが現われるだろうか、また、この問題に当てはまるみことばがあるだろうか、理性をもって考えることが必要です。時には、理性を抜きにして御霊が直接、「今祈りなさい。今あの人に手紙を書きなさい。今あの兄弟姉妹を訪ねなさい」と教えてくださることもあります。どうしてか、なぜか、別に分からなくても良いのです。

使徒行伝に出てくるピリポという男の場合もそうでした。彼は、サマリヤの町々でみことばを宣べ伝え、非常に祝福されていましたが、あるとき御霊は、「荒野へ行きなさい。誰もいないところに行きなさい」と。これは、ピリポの理性に逆らう出来事でした。このサマリヤでは多くの人々が求めるようになったのに、どうして人間のいない荒野に行かなくてはいけないのかと彼はちょっと思ったでしょう。しかし、彼は御霊の声に従ったほうが良いと思いました。ピリポは荒野へ行き、エジプトの宦官に会い、彼を救いに導き、主のみ栄えを拝することができたのです。このアフリカ人は、福音を運ぶ者となりました。サムエル上の15章を見ると、次のように書かれています。

サムエル記・第一 15章22節

「主は主の御声に聞き従うことほどに、全焼のいけにえや、その他のいけにえを喜ばれるだろうか。見よ。聞き従うことは、いけにえにまさり、耳を傾けることは、雄羊の脂肪にまさる。」

大切なことは、「聞き従う」ことであり、耳を傾けることです。

初代教会の兄弟姉妹はいろいろなことで悩んだことが使徒行伝の中に書かれています。問題にぶつかったのです。使徒行伝5章29節に、一つの答えが書き記されています。

使徒の働き 5章29節

ペテロをはじめ使徒たちは答えて言った。「人に従うより、神に従うべきです。」

「人」とは「人間」です。みな一つのことをはっきり言ったのです。大切なことは、「主は何を望んでおられるか」ということです。もちろん、人に従うより主に従うことは当然です。この中には、人の理性に従うより主に従うべきである、という意味が含まれているに違いありません。

パウロが、イエス様の啓示に会ったとき、「血肉」という言葉を用いているのは、即ち、人間に相談せず、また人の理性にも従わず、天の啓示に従ったと聖書は記しています。

ガラテヤ人への手紙 1章16節、17節

異邦人の間に御子を宣べ伝えさせるために、御子を私のうちに啓示することをよしとされたとき、私はすぐに、人には相談せず、先輩の使徒たちに会うためにエルサレムにも上らず、アラビヤに出て行き、またダマスコに戻りました。

パウロは使徒行伝の中で、三回も自分の経験について、イエス様との出会いを書いたのです。例えば、使徒行伝26章19節を見ると、

使徒の働き 26章19節

「こういうわけで、アグリッパ王よ、私は、この天からの啓示にそむかず、」

と書かれています。つまり自分の理性を大切にしなかったし、人間を喜ばせようとしなかった、と。

主の導きを求めるとき、兄弟姉妹の忠告も確かに助けになります。そのために集會に欠かさず集うということも大切です。ですから集會に集う時の心構えが大切なことではないでしょうか。主のみこころを聞き、みこころを求めたいという飢え渇きがなければ、何の役にも立ちません。アモス書8章11節。一文章ですが、次のように書かれています。

アモス書 8章11節

見よ。その日が来る。 神である主の御告げ。 その日、わたしは、この地にききんを送る。パンのききんではない。水に渴くのもない。実に、主のことばを聞くことのききんである。

またイザヤ書66章2節に、

イザヤ書 66章2節後半

「 主の御告げ。 わたしが目を留める者は、へりくだって心砕かれ、わたしのことばにおののく者だ。」

このような人々が捜し求められます。聖書を研究することよりも、みことばにおののくことこそ大切なのです。前に言いましたように、「主よ。語ってください」と、そのような心構えを持つことです。主のみこころを恐れおののいて聞く者には、主は豊かな道を、また導きを与えてくださるのです。

どうしたら御霊の導きを知ることができるのでしょうか。

* 第四番目。「御霊の導き」と「主のご目的」とは決して離すことの出来ない関係にある、ということを知る必要があります。

イスラエルの民の場合を考えると、それがよく分かります。主はご自分の民をエジプトの国から導き出されたとき、目的地カナンを既に民に教えられました。そして御霊はイスラエルの民を主の目指される地カナンに導いたのです。カナンは、主の富、主の満たしを私たちに教えています。私たちは、御霊に導かれてこの目的地に歩いて行くべく備えられています。

もし主のご目的が分かり、その目的が私たちの生涯の目標となるなら、私たちの身边に起こる全てのことが、その目的を得るために益となって働くことが分かるのです。この「益となる」ということばは、みなご存じの箇所ですが、ローマ書8章28節に出てきます。

これこそ、圧倒的な勝利者になった初代教会の兄弟姉妹の経験でした。

ローマ人への手紙 8章28節、29節

神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。なぜなら、神は、あらかじめ知っておられる人々を、御子のかたちと同じ姿にあらかじめ定められたからです。それは、御子が多くの兄弟たちの中で長子となられるためです。

「神がすべてのことを...」、「すべて」は「すべて」であって、理解できてもできなくても関係ありません。

信じる者に対するイエス様のご計画は、信じる者一人一人が御子主イエス様のかたちに換えられていくことです。これは実に驚くべき素晴らしいご計画ではないでしょうか。

主のみ旨は、例えばコロサイ書にまとめて表わされています。

コロサイ人への手紙 1章19節

神はみこころによって、満ち満ちた神の本質を御子のうちに宿らせ、

と書かれています。「御子」とは、「主イエス様」です。

コロサイ人への手紙 3章11節

そこには、ギリシヤ人とユダヤ人、割礼の有無、未開人、スクテヤ人、奴隷と自由人というような区別はありません。キリストがすべてであり、すべてのうちにおられるのです。

とあります。

さらに進んで大切なことは、「御霊の導き」は教会即ちイエス様に属する信じる者の群れと深い関係があるということです。教会によって主なる神の目的が現わされ、達成されていくからです。

旧約時代のイスラエルの民に対しては、主の導きは幕屋に現わされました。エジプトを出てから、モーセは四十日かけて主から幕屋の構造を詳しく教えられ、御霊に満ちた人の手によって主の指図どおりに幕屋ができて上がりました。このとき主は、目に見える幕屋の背後に霊的な意味を持たせ、それを私たちに教えようとなさったのです。

この目に見える幕屋になぞらえられる霊的な幕屋とは、もちろん、イエス様と御自分のからだなる教会のことです。イスラエルの場合、幕屋と主の導きには深い関係がありました。御霊を象徴する雲の柱、火の柱が上にあがると民は出発し、雲の柱が下るとそこにとどまり、導きのままにイスラエルの民は歩みました。幕屋の上に雲の柱、火の柱が燃え立ったように、イエス様のからだなる教会の上に御霊がお下りになりました。

私たちが主のみこころにかなった教会であるなら、主は私たちが思いのままに導くことがおできになるのです。もし雲の柱によって導かれたあの幕屋がなかったなら、イスラエ

ルの民は約束のカナンの地に入ることができなかつたでしょう。これと同じように、私たちも教会なしに主の満たしに至ることはできません。他の兄弟姉妹とともに生活せずに、霊の満たしに達することはできません。私たちに対する主の個人的な導きは、多かれ少なかれ、いつも主のご目的と教会に関係があります。

もし主のご目的である御子の内に満ち満ちた徳を宿らせるという事実に、心の目が開かれ、またこの目的を達成するために教会が道具として存在しているのだということを知ることができるなら、本当に幸いです。ちょっと難しくなったかもしれませんが、このことを分かりやすく言い表わしているみことばをもう一度読みましょう。

コロサイ人への手紙 1章9節

こういうわけで、私たちはそのことを聞いた日から、絶えずあなたがたのために祈り求めています。どうか、あなたがたがあらゆる霊的な知恵と理解力によって、神のみこころに関する真の知識に満たされますように。

とパウロは祈ったのです。

コロサイ人への手紙 2章9節、10節

キリストのうちにこそ、神の満ち満ちたご性質が形をとって宿っています。そしてあなたがたは、キリストにあって、満ち満ちているのです。キリストはすべての支配と權威のかしらです。

コロサイ人への手紙 3章11節

そこには、ギリシヤ人とユダヤ人、割礼の有無、未開人、スクテヤ人、奴隷と自由人というような区別はありません。キリストがすべてであり、すべてのうちにおられるのです。

もう一箇所。

エペソ人への手紙 1章22節

また、神は、いっさいのものをキリストの足の下に従わせ、いっさいのものの上に立つかしらであるキリストを、教会にお与えになりました。

イエス様は単なる救い主、罪を赦すお方ではないのです。「かしら」です。「王の王」、「主の主」です。かしらとして与えられました。

エペソ人への手紙 1章23節

教会はキリストのからだであり、いっさいのものをいっさいのものによって満たす方の満ちておられるところです。

エペソ人への手紙 4章13節

ついに、私たちがみな、信仰の一致と神の御子に関する知識の一致とに達し、完全

におとなになって、キリストの満ち満ちた身たけにまで達するためです。

とあります。このような箇所を読むと、主のみこころとは何であるか、分かります。いかなる御霊の導きもこの神のご目的に深いつながりがあります。こんにち、主の関心は全部この目的の実現にかかっているものであり、私たちの病、私たちの問題がたちどころに解決されることによってではなく、それらの環境を通して、主のみこころが私たちの内になされていくことを願っておられるのです。

主が私たちに望んでおられることは、私たちが今、一つも欠けるところがなく幸福であるということではなく、主のみこころが、私たちの内に全く成就するということです。この目的のために御霊が遣わされ、この目的を目指して私たちを導こうと望んでおられるのです。

もう一度ローマ書 8 章から 2、3 節読みます。

ローマ人への手紙 8 章 2 6 節から 2 9 節

御霊も同じようにして、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、どのように祈ったらよいかわからないのですが、御霊ご自身が、言いようもない深いうめきによって、私たちのためにとりなしてください。人間の心を探り窮める方は、御霊の思いが何かをよく知っておられます。なぜなら、御霊は、神のみこころに従って、聖徒のためにとりなしをしてくださるからです。神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。なぜなら、神は、あらかじめ知っておられる人々を、御子のかたちと同じ姿にあらかじめ定められたからです。それは、御子が多くの兄弟たちの中で長子となられるためです。

ここまで御霊の導きについて四つの点を述べてきましたが、もし何か導きを求める必要のある問題にぶつかったなら、この四つのことを思い浮かべて御霊の導きを求めましょう。

* 第五番目。その時に大切なことは、心の静けさを持っている、ということです。

以前、リーダーズダイジェストという雑誌の中に挿絵が出ていました。どのような絵かといいますと、ライオンが檻の中で暴れるように、イエス様を信じる一人の者が自分の部屋の中を行ったり来たり忙しそうにしている絵で、その側に説明が書いてありました。「誰かがその信じる者に、『どうしてそんなに忙しくしているのか』と尋ねると、『私はどうしても解決しなければならない問題があるので一生懸命だ。けれど神は暇で、のんびりしてあまり急がないらしい』と言った」と書いてありました。

もし、主の導きがはっきり分からなかったなら、主の前に静まり、「わが手を伸べて汝を諭さん」と言われる主のみことばを信じ、待ち望むことです。悪魔はいつも急がせます。けれど主は、いつも余裕を持っておられます。主の御前に全てありのまま問題を広げてお

見せし、静かに主の御声を待ち望むことが本当に大切です。

問題があるとき、私たちは問題だけを考えているいると思わずらい、主の御手が働かれるゆとりがありません。私たちが問題を全部主におゆだねし解決を求めるとき、主は豊かに答えてくださいます。とともに、御霊は私たちの霊に確信を与え、これがあなたの行くべき道であると教えてくださるはずです。

主の御前に静まることはこのように大切です。そして主の御前に静まることは、それがどんな人込みの中であっても、混んでいる電車の中であってもできることです。静まることは、自分の持っている問題を全部主に明け渡すために必要です。その時大切なのは、私たちが幼子のようになることです。素直に主にゆだね、主のお答えを強制しないということです。私たちは主のしもべとして、主の御声を聞くことができる特権を持っているのです。一番低い立場にあるしもべでさえ、主人の言いつけを聞く権利を持っていることを考えれば、当然のことです。

待ち望みのときにも、もちろん与えられた務めを忠実に全うする必要があります。主は、今までの導きに従順に従わなければ、さらに勝る導きを私たちにお与えになることができません。

主のみこころを知る方法は一概にこれだと言うことはできません。あるときは周囲の目に見える環境によって導き給います。急に環境が変わり、行くべき道を見失ってしまい、思いがけないところに道が開かれる場合があります。パウロがそうでした。彼は小アジアの伝道を禁じられ、ヨーロッパに遣わされたのです。使徒行伝16章を見ると、次のように、一緒に働いたルカが書いたのです。

使徒の働き 16章6節から10節

それから彼らは、アジアでみことばを語ることを聖霊によって禁じられたので、フルギヤ・ガラテヤの地方を通った。こうしてムシヤに面した所に来たとき、ピテニヤのほうに行こうとしたが、イエスの御霊がそれをお許しにならなかった。それでムシヤを通して、トロアスに下った。ある夜、パウロは幻を見た。ひとりのマケドニヤ人が彼の前に立って、「マケドニヤに渡って来て、私たちを助けてください。」と懇願するのであった。パウロがこの幻を見たとき、私たちはただちにマケドニヤへ出かけることにした。神が私たちを招いて、彼らに福音を宣べさせるのだ、と確信したからである。

確信してから、初めて行動しました。ある時には友の便りにより、またある時には本により、御霊は働いて私たちを導いてくださる場合もあるでしょう。またある場合には一つのみことばを御霊が取り上げ、これこそ主のみ栄えを現わす道であり、この道に行くべきだと示してくださる場合もあるでしょう。いかなる方法にしる、御霊は私たちに常に確信を与えてくださいます。その時主ご自身の平安が私たちのたましいを支配し、不安と恐れ

はすっかり消えてなくなります。コロサイ書に、この平安について書かれています。

コロサイ人への手紙 3章15節

キリストの平和が、あなたがたの心を支配するようにしなさい。そのためにこそあなたがたも召されて一体となったのです。また、感謝の心を持つ人になりなさい。

「キリストの平和」とは、「イエス様ご自身の平安」です。

つまりここでただ一つ言えることは、導きの方法が何であれ、御霊だけが私たちを導くことがおできになるということです。もし主のみこころを知ることができたら、私たちは確信を持ってそのみこころを成すことができます。

私たちはこれから勝利を得るために努める必要はありません。もう既にイエス様にあつて勝利を得ている者ですから、勝利を伝えていきたいものです。アブラハムはそのようにしました。ローマ書4章の中に、この信仰の父と呼ばれたアブラハムについて、次のように書き記されています。本当にすごい証しです。結局四千年前にアブラハムは、

ローマ人への手紙 4章18節から21節

彼は望みえないときに望みを抱いて信じました。それは、「あなたの子孫はこのようになる。」と言われていたとおりに、彼があらゆる国の人々の父となるためでした。アブラハムは、およそ百歳になって、自分のからだ死んだも同然であることと、サラの胎の死んでいることとを認めても、その信仰は弱りませんでした。彼は、不信仰によって神の約束を疑うようなことをせず、反対に、信仰がますます強くなって、神に栄光を歸し、神には約束されたことを成就する力があることを堅く信じました。

マタイの福音書 17章20節

イエスは言われた。「あなたがたの信仰が薄いからです。まことに、あなたがたに告げます。もし、からし種ほどの信仰があったら、この山に、『ここからあそこに移れ。』と言えば移るのです。どんなことでも、あなたがたにできないことはありません。」

最後に主の導きに対する従順とその従順の結果について、一言付け加えたいと思います。

御霊は、ただ一つの目的をもって私たちを導いてくださいます。その目的は、私たちにとってイエス様がすべてのすべてとなり、私たちが主の御姿に変えられていくことです。御霊は限られた視野を持った私たちと違って、すべてを見きわめて私たちを導いておられます。霊的な成長は、御霊の導きに従順に従うことによってだけできるのです。従順に従っていくとき、さらに豊かに御霊に満たされていきます。

忠実に従うことの結果は、私たちに特別な賜物を与え、いわゆる幸福な生涯に私たちを導くとは限りません。従順に従う者には御霊が与えられると約束されていますが、聖い御霊の存在は、古き人にとって、私たちの生まれつきの性質にとって決してありがたいことではありません。バプテスマのヨハネは、「彼は、(即ちイエス様は)必ず栄え、私は衰える」と

言いましたが、古い性質が消え、己を滅し、謙遜の谷に下ることは決して楽なことではありません。御霊に導かれるということは、私たちの本来の性質に反することです。御霊に導かれていくとき、自分を義とすること、悪にさといこと、許しがたい心、人目につきたいこと、これらの醜い性質があらわにされてくることを意味しています。

イエス様が御父に従順に従われた結果は、孤独になり、誤解され、ついに十字架にかけられるということでした。もし私たちが御霊に導かれるままに従順に歩むなら、イエス様や、使徒たちや、また多くの聖徒たちと同じように、苦しみに会うことでしょう。

イエス様は、十字架の前に心から叫び祈られました。ヨハネ伝 17 章 14 節を見ると、次のように祈られました。このヨハネ伝 17 章のイエス様の祈りを見ると、本当にイエス様のことはやはりつかめません。全く比類なきお方です。

ヨハネの福音書 17 章 14 節

「わたしは彼らにあなたのみことばを与えました。しかし、世は彼らを憎みました。わたしがこの世のものでないように、彼らもこの世のものでないからです。」

ヨハネの福音書 17 章 24 節

「父よ。お願いします。あなたがわたしに下さったものをわたしのいる所にわたしと一っしょにおらせてください。あなたがわたしを世の始まる前から愛しておられたためにわたしに下さったわたしの栄光を、彼らが見るようになるためです。」

このイエス様の祈りは必ず実現されます。また昇天された後、イエス様は天から御声をかけて次のように言われました。

ヨハネの黙示録 3 章 21 節

「勝利を得る者を、わたしとともにわたしの座に着かせよう。それは、わたしが勝利を得て、わたしの父とともに父の御座に着いたのと同じである。」

ただ天に入ることではないのです。「わたしとともにわたしの座に着かせよう」と。

もし御霊が私たちを導いて、私たちがパウロと同じように、「私たちはキリストの心を持っている」と心から言うことができるなら、本当に幸いです。

もう一箇所読んで終わります。

コリント人への手紙・第一 2 章 16 節

「いったい、「だれが主のみこころを知り、主を導くことができたか。」ところが、私たちに、キリストの心があるのです。」

このように言えるようになったなら、御霊はさらに私たちを導いて御座にいますイエス様のもとに導いてくださるに違いありません。

了